

書 評

荻野昌利著『《文化》とはなにか——一つの観念の興亡の歴史：1830-1970（イギリスにおける）』

（大阪教育図書、2021年）

舟川 一彦（上智大学 名誉教授）



以下の文章は通常の意味での書評——すなわち書物の内容紹介と批評的な論評——にはなりえないことを、最初にことわっておかなければならない。荻野昌利先生が日本ヴィクトリア朝文化研究学会の会長に就任される時に突然電話でリクルートされて会誌『ヴィクトリア朝文化研究』の編集委員になり、第8回大会では先生の指示のもとでシンポジウムの司会・講師役を務めた私は、少なくともこの学会の会員として学会の関心範囲内にある事柄について語る際には、いわば距離が近すぎて先生に客観的に向き合うことができないのだ。私が感じる「近さ」は、このように学会内で〈目を掛けてもらった〉者として感じる恩義によるところもあるが、もうひとつ、自分の生業である大学教育の問題、特に文学部のあり方について共有する考え方——^{くだん}件のシンポジウムのタイトルは「教養教育の光と影」だった——によるところもあった。その意味でもこの本をニュートラルな立場から論評するのは私にはなかなか難しい。とはいえ、書評者として最低限の責任を果たすために、以後は荻野先生を「著者」と呼び、可能な限り客観的な態度を心がけることにする。

『《文化》とはなにか』という大上段に振りかぶったタイトルを冠したこの本は全9章から成り、ちょうど真ん中の第5章をクライマックスとして、前半でヴィクトリア朝中期までに“culture”という語を結晶の核として「教養」そして「文化」という概念がポジティブな含蓄を持つものとして構築される過程を、後半ではそうしてイデオロギー化された概念が世紀末から20世紀に分解・崩壊し、ついにネガティブな価値を伴って語られるようになるまでの経緯をたどる。つまり、レイモンド・ウィリアムズの『文化と

社会』(Raymond Williams, *Culture and Society, 1780-1950*, 1958)の扱う歴史範囲の始点と終点を少し後ろにずらし、ラヴジョイ(A. O. Lovejoy)流の「観念の歴史」の方法に倣って、語と観念の発展的生成と変化の内的プロセスにより重点を置いていると言え、この本の概略的イメージを言いあらわしたことになるだろうか。

第1章は、古典ギリシャの「パイディア」に源流を持つ西洋の教養主義思想が1830年代に特殊英国的な形で浮上した様を記述する。カーライル(Thomas Carlyle)の「機械的時代(Mechanical Age)」というフレーズによる時代診断と、ミル(John Stuart Mill)の「過渡期」——「古い制度や教条がすでに体に合わなくなってしまう」た時代——という時代認識をふまえて、これに対処するための新しい「パイディア」として、ミルが“culture”の名のもとに、コウルリッジ(Samuel Taylor Coleridge)の国民教育論に依拠しつつ「役に立つ専門知識」と区別される全人格的な教養の理想を打ち出した。自らの思想上の師であるベンサム(Jeremy Bentham)の教育観にあえて背を向けるミルの新しい教養主義の中には、すでに《教養》が《文化》へと広がって行く契機が含まれていたのだと著者は言う。

第2章は、1850-60年代に出た大学の理念についての二つの発言を取り上げる。稀代の宗教思想家ニューマン(John Henry Newman)がアイルランドのカトリック大学創立に際して新学長として行った連続講演——のちに『大学の理念』(*The Idea of a University*, 1873)に収録——は、まぎれもなく「パイディア」の伝統を継承するものであり、そこには教養主義の精神が息づいている。しかし(と著者は但し書きをつける)、ニューマンは“culture”を明確な概念として定義することができず、それを確たるイデオロギーにまで昇華するに至らなかった。一方、ミルが1867年にセント・アンドルーズ大学で行った「名誉学長就任記念講演」(“Inaugural Address Delivered to the University of St. Andrews”)は、第1章で紹介されたミルの教育理念を発酵させ蒸留した「いわばミルの《教養主義》の基本思想のエッセンス」である。この講演は「明らかに実学優先の社会的風潮に対する批判」であり、この点で「ニューマンの大学の理念と基本的に通じ合う」。ただし、ミルは知育、徳育と並ぶ教育の第三の部門として文学や美術(近代文学や近代美術を含む)を通して得られる教養——「感情教育とか美意識の涵養」

——を挙げており、のちのアーノルド (Matthew Arnold) と通じ合う俗物的風潮への反撥が見られるという点で、著者はミルをニューマンよりも「新しいタイプの“culture”を主導する教養主義者」と位置づけている。

第3章で著者は、19世紀中葉の時点で教養主義の伸張を妨げた強固な反知的影響力に目を配る。ニューマンやミルが論じた大学レベルの教育と無縁な庶民の間では、根強いピューリタンの信仰風土にも支えられて、スマイルズの『自助論』(Samuel Smiles, *Self-Help*, 1859) に典型的にあらわれているような、学校や書物に頼ることなく人生における実経験を通して自身を《鍛錬》する“self-culture”をよしとする精神が優勢を占めていた。この風潮のために、広く国民の間で“culture”が《教養》という概念を有するようになるのはもう少し後の時代へと持ち越されることになる。

第4章では、教養主義のもうひとつの阻害因となった合理主義と科学勢力の擡頭を取り上げる。1831年に結成された「科学進歩促進協会」(BAAS)と1826年に旧来の大学の対抗物として創立されたロンドン大学は、テクノロジーに代表される実学への指向と脱宗教的傾向によって、“culture”の概念をそれまでの教養主義の範囲に収まらないものに変容させた。信仰と科学の狭間で揺れ動く知識人たちは、その二つを強引に両立させるいわゆる「ヴィクトリア朝的妥協」によって難局を乗り切ろうとしたが、科学技術の勝利はすでに明らかだったと著者は言う。

そしてこの本の、そしてヴィクトリア朝教養主義そのものの、クライマックスが来る。第5章は、著者が《教養》の「最大の布教者」と呼ぶマシュー・アーノルドを論じる。他の知識人たちと同様、信仰の危機との苦闘から出発したアーノルドは、30歳前後にして古典に信頼できる権威を見出し、出口を見つける。続いて彼はこの《古典》の権威を現代の問題解決に役立てるために「批評」の精神の必要性を説き、ついに『教養と無秩序』(*Culture and Anarchy*, 1869)で《教養》を限られたエリート集団の人格育成のみならず「全国的な健全な批評精神の向上」に資するものとして権威化するに至った。教養主義の形成過程の中で『教養と無秩序』が意味深いのは、もう一点、ここで個人の《教養》と国民の《文化》という概念が“culture”の一語の中で合体していることだと著者は指摘している。

第6章は、1880年代初頭に行われた講演を通じてのハックスリー (T. H.

Huxley)とアーノルドの舌戦を通じて、科学対文学の対立構図の中で科学の地歩がますます確かなものになり、文学を代表するアーノルドが妥協あるいは軌道修正を余儀なくされる状況が出来た経緯をたどる。ただし、著者によれば、この時点で対立はまだ決定的な決裂にまで進んでおらず、アーノルド的な《教養》の概念が否定される事態には至っていないという。

しかし、世紀末から20世紀に入ると、アーノルドの「光輝く《教養》の世界」は世を覆う漠然たる不安と大戦の惨禍に呑み込まれて、視界から消えてしまう。その中で西洋文化の伝統を甦らせるべく登場したのがエリオット(T. S. Eliot)で、《文化》をめぐる彼の提言の紹介が第7章の内容となる。エリオットはアーノルド以上に個人の《教養》より社会の《文化》に重きを置き、20世紀の文明の断片化に対する歯止めとして宗教——目に見える教会としての国教会——に期待をかけた。が、こうして《文化》概念を定義しようとする努力の中でこの概念は「把捉できないまでに膨張」してしまい、エリオットの定義にほころびが目立つようになったと著者は見ている。

第8章で取り上げられるのは1960年前後に耳目を集めたスノウ(C. P. Snow)とリーヴィス(F. R. Leavis)の論争である。ウエルズ(H. G. Wells)らによって掻き立てられた大衆の科学への関心に後押しされた科学擁護者スノウと、守勢に回った文学擁護者リーヴィスの論争は、80年前のハックスリー対アーノルドの紳士的なやりとりとは似ても似つかぬ泥仕合の様相を呈した。このことは、文化的断裂がいよいよ修復不可能になったこと、そして「《文化》という概念そのものが、いつの間にかアメーバのように分裂・増殖・膨張をつづけ、気がつくとなだれにも収拾のつかないほど巨大なモンスター概念になってしまった」ことを物語っていると著者は解説する。

最終第9章で著者はいよいよ《文化》の理想の消滅を語る。ジョージ・スタイナー(George Steiner)は彼の予言的な連続講演『青鬚の城にて』(*In Bluebeard's Castle: Some Notes Towards the Redefinition of Culture*, 1971)でナチスの残虐行為の責任を問い、エリオットもろとも19世紀につくられた教養／文化概念——「自由な教養文化の理想的庭園」の神話——を批判した。こうして否定された教養主義に取って代わる20世紀後半の文化として生じたのが、縦型の社会構造とキリスト教を前提としない《ポスト・カル

チャー》なるもので、これにて《文化》は消滅し、復活の予兆はない、として著者はこの本を結んでいる。

以上の要約からおわかりのように、この本には著者の旧著『歴史をく読む——ヴィクトリア朝の思想と文化』（英宝社、2005年）と内容の重複する部分もある。が、新著では焦点が《教養》および《文化》という概念そのものの形成と変質、消滅のプロセスに絞られ、より一貫性（あるいは起承転結）のあるストーリーを紡ぎ出そうという意識が感知できる。「序文」によると、このような意識の始まりは著者が日本ヴィクトリア朝文化研究学会の会長に就任したことにあった——「実は会長に推されて初めて『文化って何だ』と考えるようになった。」そして「私なりにヴィクトリア朝の様々な文献を読み漁った。」今わかるのは、学会の第11回大会（甲南大学）で著者が『《文化》とはなにか？』というストレート極まりないタイトルで講演を行ったのがまさにこの時期だったということだ。この時、著者が「（文化とは何かが）わからない」という言葉を連発したのが違和感とともに私の記憶にこびりついている。「文化」を定義するなどというのが絶望的な試みであることは、傍目八目、聴衆である我々のほとんどにはすでに明らかだったと思う。文化研究を謳った我々の学会のメンバーは大半が文化の定義ではなく現象を研究対象としている。それでも、この人は問わずにはいられなかったのだろう。

著者がこの本で取り上げている「様々な文献」は、上の内容紹介からわかるように、誰もが名前を知っているイギリス思想史上のビッグ・ネームの手になるものばかりである。珍しい資料を持ち出して読者をびっくりさせてやろうとか、変わったことを言って注目を引こうというような気持ちはまったくなく、あくまでも重要な第一次資料と格闘して自身と自身の研究対象の関係を見定めることが著者の目的だったに違いない。その結果がこの本——「文化」の定義を追い求めた先人たちの模索の跡をたどったストーリー——となった。著者をここまで突き動かしたのは、現代の文化状況に関する憂慮、特に現代日本の大学に身を置いてきた人間としての切迫した危機感と、同じ危機感を持ったヴィクトリア朝人への共感である。この意識は、いちいち拾い上げて指摘する余裕はないが、この本のあちこちにあらわれている。アーノルドを「時代錯誤の夢想家」（91頁）と呼んだ著

者は、「あとがき」でそのアーノルドに同化する。「巷間では私のごとき人間を救い難い時代錯誤症アナクロニストと呼ぶかもしれない。そう呼ばれても結構。私は一向に気にしない。長い《文化》の伝統を継承してきた最後の世代、先輩たちが遺してくれた《文化》の真髄に最後に自由に接することのできた幸運な世代の一人としての矜持を持っているからである」(186頁)。ここまで開き直ることは私にはまだできないけれども、この信念を目の前にしては、文化人類学への言及がないじゃないかとか、カルチュラル・スタディーズをどう評価するのかというような問題など、どうでもいいことのように思えてくるのだ。